

# 琵琶湖の「水草」

①

## ① 抽水植物(ちゅうすいしょくぶつ)

水面の上に茎や葉をのぼす。  
ヨシやマコモなど。

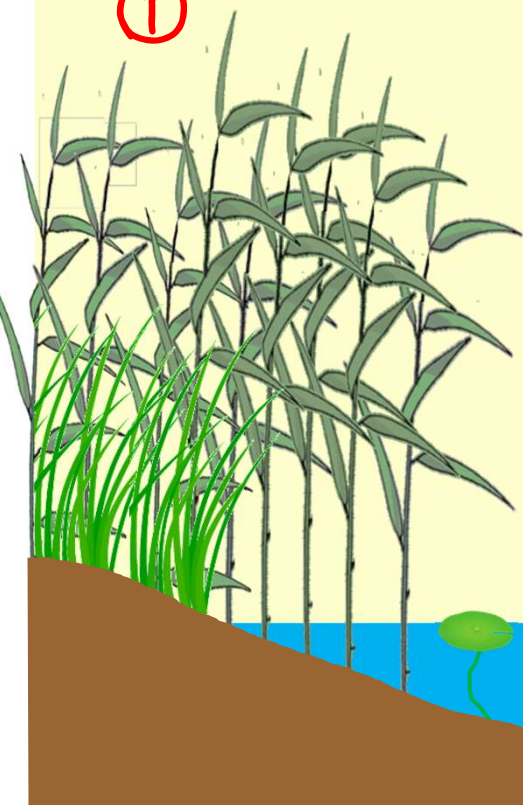
## ② 浮葉植物(ふようしょくぶつ)

水面に葉っぱを浮かべている。  
ヒシ、アサザなど。

## ③ 沈水植物(ちんすいしょくぶつ)

植物全体が水の中にある。琵琶湖では水深10mくらいまで生えている。  
クロモ、センニンモなど

このほかに、土に根を張らずに  
水に浮かぶ「浮遊植物」という  
仲間もいるよ!



②

③

「水草」というと、何となく水の中に生えている草、と思っていませんか？

実は水草には4つのタイプがあり、琵琶湖には主に①～③の3つのタイプの水草が生えています。

琵琶湖の水草の中で一番広い面積に生えていて、種類も一番多いのが「沈水植物」の仲間です。

36種が確認されており、そのうち「サンネンモ」「ネジレモ」は琵琶湖の固有種です。

# 琵琶湖の「水草」

今、琵琶湖の「水草」をめぐる、2つの大きな問題が起きています。

1つ目は沈水植物が増えすぎたこと。2つ目は「外来種」の問題です。

## 沈水植物が増えすぎている？

琵琶湖は琵琶湖大橋を境に「北湖」と「南湖」に分かれます。

南湖では1990年代から急に沈水植物が増え始め、

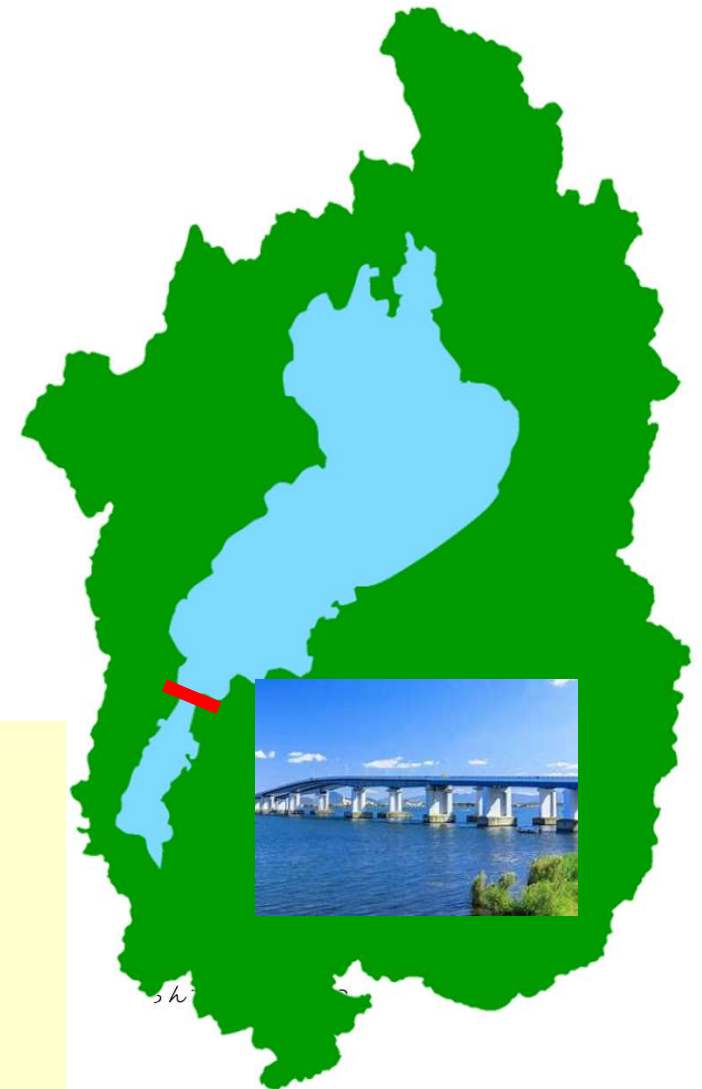
2014年には南湖の96%の面積が水草におおわれる事態に

なりました。量は毎年変わりますが「多すぎる」と感じられる

状況は今も続き、問題となっています。

## 沈水植物が増えすぎると起きる問題

- ・漁業への影響（船が出せない、網に水草がからまる）
- ・いきものへの影響（水中の酸素がなくなり、いきものが暮らさづらくなる）
- ・生活への影響（くさった水草の悪臭、流れ着いた藻で景観が悪い）



# 琵琶湖の「水草」

ちんすいしょくぶつ

滋賀県では沈水植物を減らすために、船を出して刈り取ったり、流れ着いた水草を取り除いたりしています。特に台風の後などはたくさんの水草が流れ着くので、湖の近くで暮らす人たちを悩ませています。**外来種**のコカナダモなどが増えた時期もありましたが、今、増えているのはクロモやセンニンモなどの在来種です。

昔から琵琶湖に生えていたはずの沈水植物が、今なぜ問題になってしまっているのでしょうか。



滋賀県や様々な団体、漁師などが協力して、水草の対策が行われています

# 琵琶湖の「水草」

南湖の沈水植物ちんすいしょくぶつが増えた原因は開発や水質の変化、雨の量おんだんかや温暖化による影響えいきょうなど、様々な理由が関わっているとされますが、問題が深刻になってしまった理由のひとつに「人に使われなくなってしまった」ことがあるといわれています。昔の人々にとって水辺の身近な植物は生活に欠かせないものであり、刈り取って大切に使われていました。琵琶湖の沈水植物も肥料ひりょうとして重宝され、江戸時代には刈り取りの権利けんり＝採取権さいしゅけんをめぐる争いあらそが起きたり、売買もされていた記録が残されています。

## 「水草」はどんなふうにご利用されていた？

### 抽水植物（ちゅうすいしょくぶつ）の場合

- ・よしずやすだれの材料（ヨシ）
- ・むしろ織りの材料（マコモ、ガマ）
- ・蚊取り線香の代わり（ガマの穂）
- ・薬（マコモやショウブの葉） ・食用（ヒシの実）

### 沈水植物（ちんすいしょくぶつ）の場合

- ・肥料
- ・乾かして、トイレトペーパー代わりに使った などなど



# 琵琶湖の「水草」

沈水植物は本来、魚の産卵場所となるなど様々ないきものを育み、<sup>さんらんばしょ</sup>水質保全などの役割も担う大切な存在です。滋賀県では適正な量に戻すことを目的に刈り取りをしていますが、1年間に水揚げされる沈水植物の量はなんと2,000トン以上にものぼります。

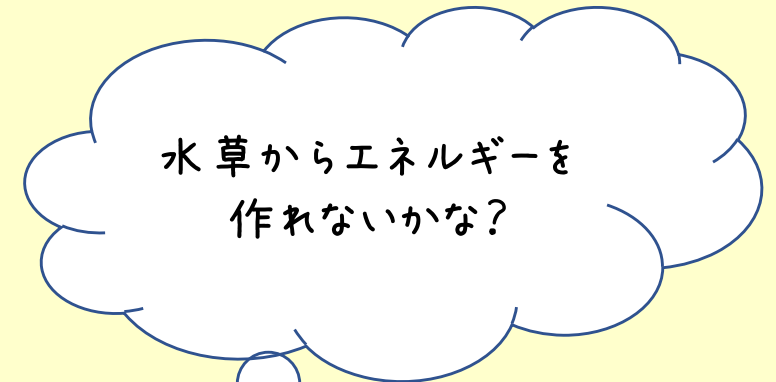
今、この沈水植物を生活の中で上手に利用することができないか、様々な工夫がはじまっています。



長浜市の建設会社・明豊建設では水草を原料にした肥料「湖の恵」（このめぐみ）を開発・販売しています



琵琶湖の水草をつかったガラス工芸品「琵琶湖彩（びわこいろ）」  
ガラス作家・神永朱美さんの作品



# 琵琶湖の「水草」

## 侵略的外来水草の対策

もともとその地域にはいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきたいきものを

「外来種」といい、中でも大きな問題を引き起こす種を「侵略的外来種」と呼びます。

琵琶湖には沢山の外来水草がありますが、特に大きな問題になっているのが「オオバナミズキンバイ」

です。オオバナミズキンバイは2009年に初めて守山市の赤野井湾で確認されました。流れ着いた

葉くきっぱや茎のかけらからでも根を生やし、その場所で成長できるほど強い繁殖力はんしょくりよくをもち、あっという

間に南湖全域に広がってしまいました。滋賀県では大学生をはじめ、多くの市民による駆除の活動が

行われています。



### オオバナミズキンバイ

南アメリカ、北アメリカ南部原産。水そうやビオトープにいれるために輸入・販売され、野生化したといわれています。ネットのように水面をおおって、ほかの植物の生育をさまたげ、水の中に光が届かないことによる他のいきものへの影響、水田や水路への侵入などが問題となっています。

